

# 畜犬談

—伊馬鵜平君に与える—

太宰治

青空文庫



私は、犬については自信がある。いつの日か、かならず喰くいつかれるであろうという自信である。私は、きつと噛かまれるにちがいない。自信があるのである。よくぞ、きょうまで喰くいつかれもせず無事に過してきたものだと思議な気さえしているのである。諸君、犬は猛獸である。馬を斃たおし、たまさかには獅し子と戦つてさえこれを征服するとかいうではないか。さもありませんと私はひとり淋しく首肯しゅくわんしているのだ。あの犬の、鋭い牙きばを見るがよい。ただものではない。いまは、あのように街路で無心のふうを装い、とるに足らぬもののごとくみずから卑下して、芥箱ごみばこを覗のぞきまわったりなどしてみせているが、もともと馬を斃すほどの猛獸である。いつなんどき、怒り狂い、その本性を暴露するか、わかつたものではない。犬はかならず鎖に固くしばりつけておくべきである。少しの油断もあつてはならぬ。世の多くの飼主は、みずから恐ろしき猛獸を養い、これに日々わずかの残ざ飯はんを与えているという理由だけにて、まったくこの猛獸に心をゆるし、エスやエスやなど、気楽に呼んで、さながら家族の一員のごとく身边に近づかしめ、三歳のわが愛子をして、その猛獸の耳をぐいと引っぱらせて大笑いしている凶にいたっては、戦慄せんりつ、眼まなこを蓋おほわざるを得ないのである。不意に、わんといつて喰くいついたら、どうする気だろう。気を

つけなければならぬ。飼い主でさえ、噛みつかれぬとは保証できがたい猛獣を、（飼い主だから、絶対に喰いつかれぬということは愚かな気のいい迷信にすぎない。あの恐ろしい牙のある以上、かならず噛む。けつして噛まないということは、科学的に証明できるはずはないのである）その猛獣を、放し飼いにして、往来をうろうろ徘徊はいかいさせておくとは、どんなものであろうか。昨年の晩秋、私の友人が、ついにこれの被害を受けた。いたましい犠牲者である。友人の話によると、友人は何もせず横丁を懐ふところ手してぶらぶら歩いていると、犬が道路上にちゃんと坐っていた。友人は、やはり何もせず、その犬の傍を通った。犬はその時、いやな横目を使ったという。何事もなく通りすぎた、とたん、わんといつて右の脚あしに喰いついたという。災難である。一瞬のことである。友人は、呆然ぼうぜん自失じしつしたという。ややあつて、くやし涙が沸いて出た。さもありません、と私は、やはり淋しく首肯している。そうなってしまったら、ほんとうに、どうしようも、ないではないか。友人は、痛む脚をひきずって病院へ行き手当を受けた。それから二十一日間、病院へ通ったのである。三週間である。脚の傷がなおつても、体内に恐水病といういまわしい病気の毒があるいは注入されてあるかもしれぬという懸念けねんから、その防毒の注射をしてもらわなければならぬのである。飼い主に談判するなど、その友人の弱気をもってしては、とてもでき

ぬことである。じつと堪こらえて、おのれの不運に溜ため息いきついているだけなのである。しかも、注射代などけつして安いものではなく、そのような余分の貯たくわえは失礼ながら友人にあるはずもなく、いずれは苦しい算段をしたにちがいないので、とにかくこれは、ひどい災難である。大災難である。また、うっかり注射でも怠おこたろうものなら、恐水病といって、発熱悩乱の苦しみあつて、果ては貌かおが犬に似てきて、四つ這ばいになり、ただわんわんと吠ゆるばかりだという、そんな凄せい惨さんな病気になるかもしれないということなのである。注射を受けながらの、友人の憂慮、不安は、どんなだつたらう。友人は苦勞人で、ちゃんとできた人であるから、醜みにくくとり乱すこともなく、三七、二十一日病院に通い、注射を受けて、いまは元気に立ち働いているが、もしこれが私だつたら、その犬、生かしておかないだろう。私は、人の三倍も四倍も復ふく讐しゅう心しんの強い男なのであるから、また、そうなると人の五倍も六倍も残忍性を發揮してしまふ男なのであるから、たちどころにその犬の頭蓋骨ずがいこつを、めちやめちやに粉ふん砕さいし、眼玉をくり抜き、ぐしゃぐしゃに噛んで、べつと吐き捨て、それでも足りずに近所近辺の飼犬ごとく毒殺してしまふであらう。こちらが何もせぬのに、突然わんといつて噛みつくとはなんとという無礼、狂暴の仕草しくさであらう。いかに畜生といえども許しがたい。畜生ふびんのゆえをもつて、人はこれを甘やかしているからいけ

ないのだ。容赦なく酷刑に処すべきである。昨秋、友人の遭難を聞いて、私の畜犬に対する日ごろの憎悪は、その極点に達した。青い焰が燃え上るほどの、思いつめたる憎悪である。

ことしの正月、山梨県、甲府のまちはずれに八畳、三畳、一畳という草庵を借り、こつそり隠れるように住みこみ、下手な小説あくせく書きすすめていたのであるが、この甲府のまち、どこへ行つても犬がいる。おびただしいのである。往来に、あるいは佇み、あるいはながながと寝そべり、あるいは疾駆し、あるいは牙を光らせて吠えたて、ちよつとした空地でもあるとかならずそこは野犬の巢のごとく、組んずほぐれつ格闘の稽古にふけり、夜など無人の街路を風のごとく、野盗のごとくぞろぞろ大群をなして縦横に駈け廻っている。甲府の家ごと、家ごと、少くとも二匹くらいずつ養っているのではないかと思われるほどに、おびただしい数である。山梨県は、もともと甲斐犬の産地として知られているようであるが、街頭で見かける犬の姿は、けつしてそんな純血種のものではない。赤いムク犬が最も多い。探るところなきあさはかな駄犬ばかりである。もとより私は畜犬に対しては含むところがあり、また友人の遭難以来いつそう嫌悪の念を増し、警戒おさおさ怠るものではなかつたのであるが、こんなに犬がうようよいて、どこの横丁にでも跳梁

し、あるいはとぐろを巻いて悠然と寝ているのでは、とても用心しきれぬものでなかった。私はじつに苦心をした。できることなら、すね当<sup>あて</sup>、こて当、かぶとをかぶって街を歩きたく思つたのである。けれども、そのような姿は、いかにも異様であり、風紀上からいっても、けつして許されるものではないのだから、私は別の手段をとらなければならぬ。私は、まじめに、真剣に、対策を考えた。私はまず犬の心理を研究した。人間については、私もいささか心得があり、たまには的確に、あやまたず指定できたことなどもあつたのであるが、犬の心理は、なかなかむずかしい。人の言葉が、犬と人との感情交流にどれだけ役立つものか、それが第一の難問である。言葉が役に立たぬとすれば、お互いの素振り、表情を読み取るよりほかにない。しつぽの動きなどは、重大である。けれども、この、しつぽの動きも、注意して見ているとなかなか複雑で、容易に読みきれるものではない。私は、ほとんど絶望した。そうして、はなはだ拙<sup>せつれつ</sup>劣<sup>な</sup>、無能きわまる一法を案出した。あわれな窮余の一策である。私は、とにかく、犬に出逢うと、満面に微笑を湛<sup>たた</sup>えて、いささかも害心のないことを示すことにした。夜は、その微笑が見えないかもしれないから、無邪気に童謡を口ずさみ、やさしい人間であることを知らせようと努めた。これらは、多少、効果があつたような気がする。犬は私には、いまだ飛びかかつてこない。けれどもあくまで

油断は禁物である。犬の傍を通る時は、どんなに恐ろしくても、絶対に走ってはならぬ。ここにこ卑しい追つ従し笑うわらいを浮べて、無心そうに首を振り、ゆっくり、ゆっくり、内心、背中に毛虫が十匹這はつているような窒ちっ息そくせんばかりの悪寒おかんにやられながらも、ゆっくりゆっくり通るのである。つくづく自身の卑屈がいやになる。泣きたいほどの自己嫌悪を覚えるのであるが、これを行わないと、たちまち嘔みつかれるような気がして、私は、あらゆる犬にあわれな挨拶を試みる。髪をあまりに長く伸ばしていると、あるいはウロンの者として吠えられるかもしれないから、あれほどこいやだった床屋へも精出してゆくことにした。ステッキなど持つて歩くと、犬のほうで威嚇いかくの武器と勘かんちがいして、反抗心を起すようなことがあつてはならぬから、ステッキは永遠に廃棄はいきすることにした。犬の心理を計りかねて、ただ行き当りばつたり、むやみやたらに御機嫌とつているうちに、ここに意外の現象が現われた。私は、犬に好かれてしまったのである。尾を振って、そろそろ後についてくる。私は、じだんだ踏んだ。じつに皮肉である。かねがね私の、こころよからず思い、また最近にいたつては憎悪の極点にまで達している、その当の畜犬に好かれるくらいならば、いっそ私は駱駝らくだに慕われないほどである。どんな悪女にでも、好かれて気持の悪いはずはない、というのはそれは浅薄せんぱくの想定である。プライドが、虫が、どうしてもそれを



許容できない場合がある。堪かん忍にんならぬのである。私は、犬をきらいなのである。早くからその狂暴の猛獸性を看破し、こころよからず思っているのである。たかだか日に一度や二度の残飯の投与にあずからんがために、友を売り、妻を離別し、おのれの身ひとつ、家の軒下に横たえ、忠義顔して、かつての友に吠え、兄弟、父母をも、けろりと忘却し、ただひたすらに飼主の顔色を伺い、阿諛あゆ追つい従しよてんとして恥じず、ぶたれても、きやんといい尻尾しっぽまいて閉口してみせて、家人を笑わせ、その精神の卑劣、醜怪、犬畜生とはよくもいった。日に十里を楽々と走破しうる健脚を有し、獅子をも斃たおす白光銳利の牙きばを持ちながら、懶惰無頼らんたぶらいの腐りはてたいやしい根性をはばからず發揮し、一片の矜きよう持じなく、てもなく人間界に屈服し、隸れい属ぞくし、同族互いに敵視して、顔つきあわせると吠えあい、噛みあい、もつて人間の御機嫌をとり結ぼうと努めている。雀を見よ。何ひとつ武器を持たぬ織弱しよじやくの小しょう禽きんながら、自由を確保し、人間界とはまったく別個の小社会を営み、同類相親しみ、欣然きんぜん日々の貧しい生活を歌い楽しんでいるではないか。思えば、思うほど、犬は不潔だ。犬はいやだ。なんだか自分に似ているところさえあるような気がして、いよいよ、いやだ。たまらないのである。その犬が、私を特に好んで、尾を振って親愛の情を表明してくるに及んでは、狼狽ろうばいとも、無念とも、なんと、いいようがない。あまりに犬

の猛獸性を畏敬し、買いかぶり節度もなく媚笑びしょうを撒まきちらして歩いたゆえ、犬は、かえって知己を得たものと誤解し、私を組みしやすしとみてとって、このような情ない結果に立ちいたったのであろうが、何事によらず、ものには節度が大切である。私は、いまだに、どうも、節度を知らぬ。

早春のこと。夕食の少しまえに、私はすぐ近くの四十九聯隊の練兵場へ散歩に出て、二、三の犬が私のあとについてきて、いまにも踵かかとをがぶりとやられはせぬかと生きた気もせず、けれども毎度のことであり、観念して無心平生を装い、ぱつと脱兎だつとのごとく逃げたい衝動を懸命に抑え、抑え、ぶらりぶらり歩いた。犬は私についてきながら、みちみちお互いに喧嘩などはじめて、私は、わざと振りかえつて見もせず、知らぬふりして歩いているのだが、内心、じつに閉口であった。ピストルでもあつたなら、躊躇ちゅうちよせずドカンドカんと射殺してしまいたい気持であつた。犬は、私にそのような、外面如菩薩げめんによぼさつ、内心如夜叉ないしんにやしゃ的の奸佞かんねいの害心があるとも知らず、どこまでもついてくる。練兵場をぐるりと一廻りして、私はやはり犬に慕われながら帰途についた。家へ帰りつくまでには、背後の犬もどこかへ雲散霧消うんさんむしょうしているのが、これまでの、しきたりであつたのだが、その日に限つて、ひどく執拗しつようで馴れ馴れしいのが一匹いた。真黒の、見るかげもない小犬である。ずいぶ

ん小さい。胴の長さ五寸の感じである。けれども、小さいからといって油断はできない。歯は、すでにちやんと生えそろっているはずである。噛まれたら病院に三、七、二十一日間通わなければならぬ。それにこのような幼少なものには常識がないから、したがって気まぐれである。いつそう用心をしなければならぬ。小犬は後になり、さきになり、私の顔を振り仰ぎ、よたよた走って、とうとう私の家の玄関まで、ついてきた。

「おい。へんなものが、ついてきたよ」

「おや、可愛い」

「可愛いもんか。追っ払ってくれ、手荒くすると喰いつくぜ、お菓子でもやって」

れいの軟弱外交である。小犬は、たちまち私の内心畏怖の情を見抜き、それにつけこみ、ずうずうしくもそれから、ずるずる私の家に住みこんでしまった。そうしてこの犬は、三月、四月、五月、六、七、八、そろそろ秋風吹きはじめてきた現在にいたるまで、私の家にいるのである。私は、この犬には、幾度泣かされたかわからない。どうにも始末ができないのである。私はしかたなく、この犬を、ポチなどと呼んでいるのであるが、半年もともに住んでいながら、いまだに私は、このポチを、一家のものとは思えない。他人の気がするのである。しつくりゆかない。不和である。お互い心理の読みあいには火花を散らして

戦っている。そうしてお互い、どうしても釈しやくぜん然ぜんと笑いあうことができないのである。はじめこの家にやってきたころは、まだ子供で、地べたの蟻ありを不審そうに観察したり、蝦蟇がまを恐れて悲鳴を挙げたり、その様には私も思わず失笑することがあって、憎いやつであるが、これも神様の御心によつてこの家へ迷いこんでくることになったのかもしれない、縁の下に寝床を作つてやつたし、食い物も乳幼児むきに軟らかく煮て与えてやつたし、蚤の取粉みとりこなどからだに振りかけてやつたものだ。けれども、ひとつき経つと、もういけない。そろそろ駄犬の本領を発揮してきた。いやしい。もともと、この犬は練兵場の隅に捨てられてあつたものにちがいない。私のあの散歩の帰途、私にまつわりつくようにしてついてきて、その時は、見るかげもなく痩せやこけて、毛も抜けていてお尻の部分は、ほとんど全部禿はげていた。私だからこそ、これに菓子を与え、おかゆを作り、荒い言葉一つかけるとはなし、腫はれものにさわるように鄭てい重ちゆうにもてなしてあげたのだ。ほかの人だったら、足蹴あしげにして追い散らしてしまつたにちがいない。私のそんな親切なもてなしも、内実は、犬に対する愛情からではなく、犬に対する先天的な憎悪と恐怖から発した老ろう獠かうな駈かけ引きにすぎないのであるが、けれども私のおかげで、このポチは、毛並もとのいい、どうやら一人まえの男の犬に成長することを得たのではないか。私は恩を売る気はもうとうない

けれども、少しは私たちにも何か楽しみを与えてくれてもよきそうに思われるのであるが、やはり捨犬はだめなものである。大めし食つて、食後の運動のつもりであろうか、下駄をおもちやにして無残に噛み破り、庭に干してある洗濯物を要らぬ世話して引きずりおろし、泥まみれにする。

「こういう冗談はしないでおくれ。じつに、困るのだ。誰が君に、こんなことをしてくれとたのみましたか？」

と、私は、内に針を含んだ言葉を、精いっぱい優しく、いや味をきかせて言つてやることもあるのだが、犬は、きよろりと眼を動かし、いや味を言い聞かせている当の私にじやれかかる。なんと甘い甘つたれた精神であろう。私はこの犬の鉄てつめんぴ面皮には、ひそかに呆あきれ、これを軽蔑さえしたのである。長ずるに及んで、いよいよこの犬の無能が暴露された。だいいち、形がよくない。幼少のころには、もう少し形の均斉もとれていて、あるいは優れた血が雑まじつているのかもしれない。幼少のころには、もう少し形の均斉もとれていて、あるいは優れたであった。胴だけが、によきによき長く伸びて、手足がいちじるしく短い。亀のようである。見られたものでなかった。そのような醜い形をして、私が外出すればかならず影のごとくちやんと私につき従い、少年少女までが、やあ、へんてこな犬じゃと指さして笑うこ

ともあり、多少見栄坊みえぼうの私は、いくらすまして歩いてても、なんにもならなくなるのである。いつそ他人のふりをしようとして早足に歩いてみても、ポチは私の傍を離れず、私の顔を振り仰ぎ振り仰ぎ、あとになり、さきになり、からみつくようにしてついてくるのだから、どうしたつて二人は他人のようには見えまい。気心の合った主従としか見えまい。おかげで私は外出のたびごとに、ずいぶん暗い憂鬱な気持ちにさせられた。いい修行になったのである。ただ、そうして、ついて歩いていたころは、まだよかった。そのうちにいよいよ隠してあつた猛獣の本性を暴露してきた。喧嘩格闘を好むようになったのである。私のお伴をして、まちを歩いて行きあう犬、行きあう犬、すべてに挨拶して通るのである。つまりかたっぱしから喧嘩して通るのである。ポチは足も短く、若年でありながら、喧嘩は相当強いようである。空地の犬の巢に踏みこんで、一時に五匹の犬を相手に戦ったときはさすがに危く見えたが、それでも巧みに身をかわして難を避けた。非常な自信をもって、どんな犬にでも飛びかかってゆく。たまには勢いきおい負けして、吠えながらじりじり退却することもある。声が悲鳴に近くなり、真黒い顔が蒼黒あおくなってくる。いちど小牛のようなシエパードに飛びかかっていって、あのときは、私が蒼くなつた。はたして、ひとたまりもなかった。前足でころころポチをおもちやにして、本気につきあつてくれなかつたのでポチも

命が助かった。犬は、いちどあんなひどいめに逢うと、大へん意気地がなくなるものらしい。ポチは、それからは眼に見えて、喧嘩を避けるようになった。それに私は、喧嘩を好まず、否、好まぬどころではない、往來で野獸の組打ちを放置し許容しているなどは、文明国の恥辱やばんと信じているので、かの耳を聳ろうせんばかりのけんけんごうごう、きゃんきゃんの犬の野蠻やばんのわめき声には、殺してもなおあき足らない憤怒と憎悪を感じているのである。私はポチを愛してはいない。恐れ、憎んでこそいるが、みじんも愛しては、いない。死んでくれたらいいと思っている。私にこのこついてきて、何かそれが飼われているもの義務とでも思っているのか、途で逢う犬、逢う犬、かならず凄せい惨さんに吠えあつて、主人としての私は、そのときどんなに恐怖にわななき震えていることか。自動車呼びとめて、それに乗つてドアをばたんと閉じ、一目散に逃げ去りたい気持なのである。犬同士けんどうしの組打ちで終るべきものなら、まだしも、もし敵の犬が血迷つて、ポチの主人の私に飛びかかってくるようなことがあつたら、どうする。ないとは言わせぬ。血に飢えたる猛獸である。何をするか、わかつたものでない。私はむごたらしく噛み裂かれ、三、七、二十一日間病院に通わなければならぬ。犬の喧嘩は、地獄である。私は、機会あるごとにポチに言い聞かせた。

「喧嘩しては、いけないよ。喧嘩するなら、僕からはるか離れたところで、してもらいたい。僕は、おまえを好いてはいないんだ」

少し、ポチにもわかるらしいのである。そう言われると多少しよげる。いよいよ私は犬を、薄気味わるいものに思った。その私の繰り返し繰り返した忠告が効を奏したのか、あるいは、かのシエパードとの一戦にぶざまな惨敗さんばいを喫きつしたせいか、ポチは、卑屈なほど柔弱にゆうじやくな態度をとりはじめた。私といっしよに路を歩いて、他の犬がポチに吠えかけると、ポチは、

「ああ、いやだ、いやだ。野蛮ですなあ」

と言わんばかり、ひたすら私の気に入られようと上品ぶって、ぶるつと胴震いさせたり、相手の犬を、しかたのないやつだね、とさもさも憐れむように流し目で見て、そうして、私の顔色を伺い、へっへっへつと卑しい追ついで従しゆう笑いするかのごとく、その様子のいやらしいといったらなかつた。

「一つも、いいところないじゃないか、こいつは。ひとの顔色ばかり伺っていやがる」

「あなたが、あまり、へんにかまうからですよ」家内は、はじめからポチに無関心であった。洗濯物など汚されたときはぶつぶつ言うが、あとはけろりとして、ポチポチと呼んで、



めしを食わせたりなどしている。「性格が破産しちゃったんじゃないかしら」と笑っている。

「飼い主に、似てきたというわけかね」私は、いよいよ、にがにがしく思った。

七月にはいつて、異変が起った。私たちは、やっと、東京の三鷹村みたかむらに、建築最中の小さい家を見つけることができて、その完成ししだい、一か月二十四円で貸してもらえようように、家主と契約の証書交して、そろそろ移転の仕度をはじめた。家ができ上ると、家主から速達で通知が来ることになっていたのである。ポチは、もちろん、捨ててゆかれることになっていたのである。

「連れていったって、いいのに」家内は、やはりポチをあまり問題にしていな。どちらもでもいいのである。

「だめだ。僕は、可愛いから養っているんじゃないんだよ。犬に復讐されるのが、こわいから、しかたなくそつとしておいてやっているのだ。わからんかね」

「でも、ちよつとポチが見えなくなると、ポチはどこへ行ったろう、どこへ行ったろう、と大騒ぎじゃないの」

「いなくなると、いつそう薄気味が悪いからさ、僕に隠れて、ひそかに同志を糾きゆうごう合し

ているのかもわからない。あいつは、僕に軽蔑されていることを知っているんだ。復讐心が強いそうだからなあ、犬は」

いまこそ絶好の機会であると思っていた。この犬をこのまま忘れたふりして、ここへ置いて、さつさと汽車に乗って東京へ行つてしまえば、まさか犬も、笹子峠ささごとうげを越えて三鷹村まで追いかけてくることはなからう。私たちは、ポチを捨てたのではない。まったくうっかりして連れてゆくことを忘れたのである。罪にはならない。またポチに恨まれる筋合もない。復讐されるわけではない。

「だいじょうぶだろうね。置いていっても、飢え死するようなことはないだろうね。死霊の祟りたたということもあるからね」

「もともと、捨犬だったんですもの」家内も、少し不安になった様子である。

「そうだね。飢え死することはないだろう。なんとか、うまくやってゆくだろう。あんな犬、東京へ連れていったんじや、僕は友人に対して恥ずかしいんだ。胴が長すぎる。みつともないねえ」

ポチは、やはり置いてゆかれることに、確定した。すると、ここに異変が起つた。ポチが、皮膚病にやられちゃった。これが、またひどいのである。さすがに形容をはばかるが、

惨状、眼をそむけしむるものがあつたのである。おりからの炎熱とともに、ただならぬ悪臭を放つようになった。こんどは家内が、まいってしまった。

「ご近所にわるいわ。殺してください」女は、こうなると男よりも冷酷で、度胸がいい。「殺すのか」私は、ぎよつとした。「もう少しの我慢じゃないか」

私たちは、三鷹の家主からの速達を一心に待っていた。七月末には、できるでしようという家主の言葉であつたのだが、七月もそろそろおしまいになりかけて、きょうか明日かと、引越しの荷物もまとめてしまつて待機していたのであつたが、なかなか、通知が来ないのである。問いあわせの手紙を出したりなどしている時に、ポチの皮膚病がはじまつたのである。見れば、見るほど、酸鼻の極である。ポチも、いまはさすがに、おのれの醜い姿を恥じている様子で、とかく暗闇の場所を好むようになり、たまに玄関の日当りのいい敷石の上で、ぐったり寝そべっていることがあつても、私が、それを見つけて、

「わあ、ひでえなあ」と罵倒すると、いそいで立ち上つて首を垂れ、閉口したようにこそそ縁の下にもぐりこんでしまうのである。

それでも私が外出するときには、どこからともなく足音忍ばせて出てきて、私についてこようとす。こんな化け物みたいなものに、ついてこられて、たまるものか、とその都

度、私は、だまってポチを見つめてやる。あざけりの笑いを口角にまぎまぎと浮べて、な  
んぼでも、ポチを見つめてやる。これは大へんききめがあった。ポチは、おのれの醜い姿  
にハツと思い当る様子で、首を垂れ、しおしおどこかへ姿を隠す。

「とつても、我慢ができないの。私まで、むず痒がゆくなつて」家内は、ときどき私に相談す  
る。「なるべく見ないように努めているんだけど、いちど見ちゃったら、もうだめね。  
夢の中にまで出てくるんだもの」

「まあ、もうすこしの我慢だ」がまんするよりほかはないと思つた。たとえ病んでいると  
はいつても、相手は一種の猛獣である。下手に触つたら噛みつかれる。「明日にでも、三  
鷹から、返事が来るだろう、引越してしまつたら、それつきりじやないか」

三鷹の家主から返事が来た。読んで、がっかりした。雨が降りつづいて壁が乾かず、ま  
た人手も不足で完成までには、もう十日くらいかかる見こみ、というのであつた。うんざ  
りした。ポチから逃のがれるためだけでも、早く、引越してしまいたかつたのだ。私は、へん  
な焦躁感で、仕事も手につかず、雑誌を読んだり、酒を呑んだりした。ポチの皮膚病は一  
日一日ひどくなつていつて、私の皮膚も、なんだか、しきりに痒くなつてきた。深夜、戸  
外でポチが、ばたばたばた痒さに身悶えしている物音に、幾度ぞつとさせられたかわから

ない。たまらない気がした。いつそひと思いにと、狂暴な発作に駆かられることも、しばしばあった。家主からは、さらに二十日待て、と手紙が来て、私のごちやごちやの忿懣ふんまんが、たちまち手近のポチに結びついて、こいつあるがために、このように諸事えんかつ円滑えんかつにすまないのだ、と何もかも悪いことは皆、ポチのせいみたいを考えられ、奇妙にポチを呪咀じゆそし、ある夜、私の寝巻に犬の蚤のみが伝播でんぱされてあることを発見するに及んで、ついにそれまで堪えに堪えてきた怒りが爆発し、私はひそかに重大の決意をした。

殺そうと思ったのである。相手は恐るべき猛獣である。常の私だったら、こんな乱暴な決意は、逆立ちしたってなしえなかつたところのものであったが、盆地特有の酷暑こくしよで、少しへんになつていた矢先であつたし、また、毎日、何もせず、ただぼかんと家主からの速達を待つていて、死ぬほど退屈な日々を送つて、むしやくしやいらいら、おまけに不眠も手伝つて発狂状態であつたのだから、たまらない。その犬の蚤を発見した夜、ただちに家内をして牛肉の大片を買いに走らせ、私は、薬屋に行きある種の薬品を少量、買い求めた。これで用意はできた。家内は少なからず興奮していた。私たちが鬼夫婦は、その夜、鳩きゆうしゆ首しゆして小声で相談した。

翌あく朝、四時に私は起きた。目覚時計を掛けておいたのであるが、その鳴りださぬう

ちに、眼が覚めてしまった。しらじらと明けていた。肌寒いほどであった。私は竹の皮包をさげて外へ出た。

「おしまいまで見ていないですぐお帰りになるといいわ」家内は玄關の式台に立って見送り、落ち着いていた。

「心得ている。ポチ、来い！」

ポチは尾を振って縁の下から出てきた。

「来い、来い！」私は、さつさと歩きだした。きょうは、あんな、意地悪くポチの姿を見つめるようなことはないのです、ポチも自身の醜さを忘れて、いそいそ私についてきた。

霧が深い。まちはひっそり眠っている。私は、練兵場へいそいだ。途中、おそろしく大きい赤毛の犬が、ポチに向って猛烈に吠えた。ポチは、れいによつて上品ぶつた態度を示し、何を騒いでいるのかね、とでも言いたげな蔑視べっしをちらとその赤毛の犬にくれただけで、さつさとその面前を通過した。赤毛は、卑劣ひれつである。無法にもポチの背後から、風のごとく襲いかかり、ポチの寒しげな辜丸こうがんをねらった。ポチは、咄嗟とつさにくるりと向きなおつたが、ちよつと躊躇ちゆうちよし、私の顔色をそつと伺った。

「やれ！」私は大声で命令した。「赤毛は卑怯だ！ 思う存分やれ！」

ゆるしが出たのでポチは、ぶるんと一つ大きく胴震いして、弾丸のごとく赤犬のふところに飛びこんだ。たちまち、けんけんごうごう、二匹は一つの手毬てまりみたいになって、格闘した。赤毛は、ポチの倍ほども大きいずうたい図体をしていたが、だめであった。ほどなく、きやんきやん悲鳴を挙げて敗退した。おまけにポチの皮膚病までうつされたかもわからない。ばかなやつだ。

喧嘩が終つて、私は、ほつとした。文字どおり手に汗して眺めていたのである。一時は二匹の犬の格闘に巻きこまれて、私もともに死ぬるような気さえしていた。おれは噛み殺されたつていいんだ。ポチよ、思う存分、喧嘩をしろ！ と異様に力んでいたのがあった。ポチは、逃げてゆく赤毛を少し追いかけて、立ちどまって、私の顔をちらと伺い、きゆうにしよげて、首を垂れすぐすぐ私のほうへ引返してきた。

「よし！ 強いぞ」ほめてやって私は歩きだし、橋をかたかた渡つて、ここはもう練兵場である。

むかしポチは、この練兵場に捨てられた。だからいま、また、この練兵場へ帰ってきたのだ。おまえのふるさとで死ぬがよい。

私は立ちどまり、ぼとりと牛肉の大片を私の足もとへ落として、

「ポチ、食え」私はポチを見たくなかった。ぼんやりそこに立ったまま、「ポチ、食え」足もとで、ぺちやぺちや食べている音がする。一分たたぬうちに死ぬはずだ。

私は猫背ねこせになつて、のろのろ歩いた。霧が深い。ほんのちかくの山が、ぼんやり黒く見えるだけだ。南アルプス連峰も、富士山も、何も見えない。朝露で、下駄がびしょぬれである。私はいつそうひどい猫背になつて、のろのろ帰途についた。橋を渡り、中学校のまえまで来て、振り向くとポチが、ちゃんといた。面目なげに、首を垂れ、私の視線をそつとそらした。

私も、もう大人である。いたずらな感傷はなかった。すぐ事態を察知した。薬品が効かなかったのだ。うなずいて、もうすでに私は、白紙還元である。家へ帰つて、

「だめだよ。薬が効かないのだ。ゆるしてやろうよ。あいつには、罪がなかったんだぜ。

芸術家は、もともと弱い者の味方だったはずなんだ」私は、途中で考えてきたことをそのまま言つてみた。「弱者の友なんだ。芸術家にとつて、これが出発で、また最高の目的なんだ。こんな単純なこと、僕は忘れていた。僕だけじゃない。みんなが、忘れているんだ。僕は、ポチを東京へ連れてゆこうと思うよ。友がもしポチの恰好かつこうを笑ったら、ぶん殴なぐつてやる。卵あるかい？」



「ええ」家内は、浮かぬ顔をしていた。

「ポチにやれ、二つあるなら、二つやれ。おまえも我慢しろ。皮膚病なんてのは、すぐなおるよ」

「ええ」家内は、やはり浮かぬ顔をしていた。



# 青空文庫情報

底本：「日本文学全集70 太宰治集」集英社

1972（昭和47）年3月初版

初出：「文学者」

1939（昭和14）年8月

入力：網迫

校正：田尻幹二

1999年4月12日公開

2009年3月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 畜犬談

—伊馬鵜平君に与える—

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 太宰治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>